2016年6月1日

八街キリスト教会

**「ゼカリア書：全地の神殿エルサレム」**

聖書箇所：ゼカリヤ書1:1-6、9:9-10、14:21

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　本日はゼカリヤ書からです。3箇所読んでいただきました。ゼカリヤ書は複数の人物によって書かれたのではないか、と言われている文書ですが、それぞれ第一ゼカリヤ、第二ゼカリヤ、第三ゼカリヤの記述と言われているところから一か所づつとりあげました。この3箇所に重点をおきながらも、ゼカリヤ書全体を見ながらお話しいたします。

　例によって、時代背景をご説明いたします。時期的にはゼカリヤ書の直前のハガイ書とほぼ重なっています。ハガイ書がBC520年頃と推測されるのに対し、ゼカリヤ書はBC519年以降と推察されています。そのころの時代背景を簡単に復習致します。出発点はバビロン捕囚です。BC587年に南王国ユダが新バビロニア帝国によって滅ぼされます。その前後3回にわたってユダ王国の指導者たちはバビロニアの首都バビロンにつれて行かれました。これをバビロン捕囚と言います。その後BC539年、バビロニアはペルシャによって滅ぼされます。ペルシャは宗教的には寛容策をとり、キュロス王はユダヤ人に対し、エルサレムへの帰還許可を与えます。これに答え、一部のユダヤ人はエルサレムに戻り、神殿再建にとりかかりましたが、反対にあいこの事業はとん挫します。しかしBC520年頃、神殿工事再開の機運が高まり、総督ゼルバベルと大祭司ヨシュアの指導の下でBC515年遂に完成いたしました。ハガイ、ゼカリヤ両預言者はこの工事を励ました人々でした。神殿はなんとか完成したのですが、老人はソロモンの神殿の方がずっと素晴らしい、と言って再建神殿をばかにした、と言われています。この再建神殿は第二神殿とよばれ、ヘロデ大王の増築を経て、AD70年のローマによるエルサレム破滅時に壊滅します。「嘆きの壁」と言われているのはこの第二神殿の城壁の一部です。ゼカリヤという名前は「主が彼に目をとめた」という意味で、旧約聖書にはこの名前が多数現れます。

2節に主はゼカリヤの先祖たちを激しく怒られた、とあります。この部分はヘブル語では「怒りを怒る」と書かれており「カーツァフ」という「怒る」の強調となっています。そのため新改訳では「激しく怒られた」と訳されています。神殿再建が順調にいかず中断されたことが背景にある、と思われます。ゼカリヤ達はバビロンから帰還した人々ですが、エルサレムの地に残った者達はハガイ達の神殿再建の声に応じず非協力的態度をとったことを指して、主なる神の怒りが爆発したのです。3節がポイントです。「あなたは、彼らに言え。万軍の主はこう仰せられる。わたしに帰れ。－－万軍の主の御告げ－－そうすれば、わたしもあなたがたに帰る、と万軍の主は仰せられる」と言います。「わたしに帰れ」の「帰れ」はヘブル語の「シューブ」であり。新約の用語では「悔い改めよ」に該当します。神の恵みから遠ざかり自分の力により頼んで居ることをやめ、神の元に帰れ、と言われています。もし、こうなれば神様も人々の元に帰って来る、といわれています。前者の人が神に立ち帰るのは「シューブ」の通常の使い方ですが、神が人に立ち帰る、という言い方は例外的です。イスラエルの神は人が立ち帰るのに対し応答される神である、ということを強調するためと思われます。神様の方からいらっしゃるというのは神の恵みの現れです。福音書における放蕩息子の話のなかで最後の場面で「父親は---走り寄って彼を抱き」とあります。同じ意味と考えられます。4節に「悪の道から立ち帰り、---悪いわざを悔い改めよ」と出てきますが、この「立ち返り」と「悔い改めよ」は原文では同一の単語であり、「シューブ」です。実はこの言葉がゼカリヤ書だけでなんと17回も使われています。1:6の「立ち返って」、1:16の主がエルサレムに「帰る」、4:1の御使いが「戻ってきて」などなどです。1:1-6の部分は「悔い改めの勧告」と称せられている箇所ですので「シューブ」が多く出てくるのは解るのですがこの言葉がゼカリヤ書全体に使用されている、ということはこれからのゼカリヤの預言においても我々に悔い改めを迫る神の意志が存在する、と考えるべきでしょう。私たちはゼカリヤの先祖たちと同列の信仰薄い者なのだと思います。

1:7より８つの幻が述べられます。ゼカリヤ独自の表現も多数あり興味深いところですが割愛します。

八つの幻についての記述のあと、6:9-15節には「若枝」が出てきます。12-13節をお読みします。「彼にこう言え。『万軍の主はこう仰せられる。見よ。ひとりの人がいる。その名は若枝。彼のいる所から芽を出し、主の神殿を建て直す』。彼は主の神殿を建て、彼は尊厳を帯び、その王座に着いて支配する。その王座のかたわらに、ひとりの祭司がいて、このふたりの間には平和の一致がある。』 」とあります。おそらくゼルバベル、ヨシュアに対応するふたりが幻として現れているのだと思われます。幻として現れた二人について語られているのであり、天的存在です。現実の二人ではありません。二人の幻の内一方は「若枝」ですから救い主メシアです。12節に「見よ。一人の人」という表現がでてきます。これは後にラテン語で「エケ・ホモ」即ち「見よこの人を」となった言葉です。「見よこの人を」はヨハネ福音書19:5でポンテオ・ピラトがユダヤ人に主イエスを引き渡す時に発した言葉です。新改訳聖書では「さあ、この人です」と訳されていますが口語訳では「見よ、この人だ」と訳されています。ギリシャ語原本を直訳すると「見よ、この人」でありヘブル語訳も「見よ、この人」です。ローマ・カソリックはゼカリヤ書のこの部分はイエス・キリストの預言としてきたため、「エケ・ホモ」という表現を大切にしてきたのです。エルサレムに「エケ・ホモ」教会というのがあります。

9章9-10節は当初お読みいただいた３箇所の内の二番目の部分です。9節はゼパニヤ書3:14-15とほぼ同じ表現です。シオンの娘、エルサレムの娘が両方出てくる節を探しますと、預言書以外で第二列王記19:21に在ります。「主が彼について語られたことばは次のとおりである。 処女（おとめ）であるシオンの娘は あなたをさげすみ、あなたをあざける。 エルサレムの娘は あなたのうしろで、頭を振る」とあります。これはアッシリア王セナケリブに告げられた主の言葉であり、その夜アッシリア軍は主の使いに大敗致します。これは預言者イザヤがヒゼキヤ王に示した預言です。シオンの娘は処女である結婚前の女性、エルサレムの娘は結婚後の若い女性を指しているようです。ヘブル語では町は女性形ですからこのような表現がされたのでしょう。そしてこの救いを齎す方は「柔和で、ろばに乗られる。それも雌ろばの子の子ろばに」と言われています。申命記17:16では「王は、---馬を多く増やしてはならない」と言われています。また第二サムエル記16:2でサムエルがエルサレムから逃れる時「二頭のろばは王の家族がお乗りになるため」として提供されています。おそらく馬は戦闘行為を想起させるので平和の君としての王はろばに乗ってくる、と信じられていたのでしょう。「雌ろばの子の子ろば」とは掛け合わせでできたラバではなく純粋のろばである、という意味です。「柔和」という部分は「へりくだり」とも訳すことができます。10節では平和が一帯を覆うことが述べられています。エフライムはかつての北王国イスラエルを象徴して言う言葉です。この軍備否定即ち戦争放棄はイザヤ、ミカの伝統です。聖なる戦争即ち聖戦により純潔なヤハヴェ信仰集団としてのイスラエルを形成する神の試みは成功しませんでした。預言者はその原因はイスラエルの罪即ち偶像や自らの力に頼ろうとするところにあることを見抜き、真の主の民の共同体は戦いを全面的に止め、神の国は、贖いの主の来臨によってのみ成し遂げられることを宣言した、と言うべきでしょう。ミカ書4:3の一部をお読みします。「彼らはその剣を鋤に、 その槍をかまに打ち直し、 国は国に向かって剣を上げず、 二度と戦いのことを習わない」とあります。

　14章でやっと主に日の希望の面が描かれます。2節で大いなる困難があっても「残りの民」が町にいる、と言います。4節では主の足がオリーブ山の上に立つ、と言っています。シオンの丘は敵の手に在るので神はオリーブの山に降り立ったのでしょう。「真中で二つに裂け」と言っていることから見ると地震の発生でしょう。5節によればユダの王ウジヤの時に地震があったようです。BC783-750がウジヤ別名アザリヤの治世ですからゼカリヤの250年前くらいの話です。そして主が来られます。「聖徒たち」も共に来ます。ここでの「聖徒」は天使のような者たちのことであり、天的な存在です。「聖徒」という言葉は文字通りには聖なる者、ということであり、そもそもは神様の呼称でした。旧約の時代に適用範囲が変化してゆき、神の使者、天使のような存在を指して使用されるようになりました。しかし、例外的にエリシャのような預言者を神の使者と同様な者としてこの言葉を適用することがありました。これがBC2cのマッカビーの反乱の頃には迫害の中、神殿祭儀を守ろうとする敬虔な人々も「聖徒」に加えられるようになりました。そして新約の時代には主の使徒を主に指す言葉となり、現代ではキリスト者全般を指して使う言葉にまで拡大使用されています。こう考えるとあまり気安く「聖徒」という言葉を使用することはできませんし、また使用する時は真（まこと）の信仰の心を持って使用すべきであろう、と思われます。黒人霊歌で「聖者の行進」と言う曲がありました。そもそもは葬儀の曲だったようです。

11節の「絶滅」の言葉は注意に値します。これは「へ―レム」という名詞ですがそもそもは「ハーラム」という「聖絶する」という意味の動詞です。これはヨシュア記等にでてくる、神の名に置いて絶滅させる、乃至は殺して神に奉納する、と言う意味の言葉です。この14:11でエルサレムではこの聖絶はもはや起きない、と言われています。エルサレムという名は「平和の町」の意味ですから、人々が「安らかに住む」ようになる、というのです。12-15節でエルサレムに攻め上るすべての国々が災害に見舞われます。互いに滅ぼしあいます。

　そして遂にエルサレムの完全回復がなされます。16節以降が当初お読みいただいた三番目の箇所です。16節に「仮庵の祭り」があります。太陽暦では9月末から10月半ばにかけて行われる秋の収穫祭です。仮庵の祭りと言われるのは出エジプトの40年の旅で仮庵に住んだことを思い起こさせるためです。17-19節で仮庵の祭りに参加しない民族には神の罰が下される、と言われています。エジプトはその代表格です。20節に「主への聖なるもの」という表現がでてきます。この言葉は出エジプト記28:36と48:14にでてきます。主なる神に捧げられた特別なもの、ということの徴（しるし）です。そして21節では主の宮の中のなべがこの「主への聖なるもの」になる、といわれています。なべは日常用具であり俗なるものの典型ですがここでは「主への聖なるもの」とされています。新しいイスラエルの下では世俗の区別は意味を持たず、すべてが聖なるものとして扱われる、という事でしょう。この世の職業を神からの召命と理解するプロテスタント信仰もこれに通ずるところがあるかもしれません。とにもかくにも「主への聖なるもの」とされたなべで、食物を煮るようになる、といわれています。最後の「万軍の主の宮にはもう商人がいなくなる」というのは面白い表現です。文字通りには「カナン人」という表現です。イザヤ書23:8でカナン人と商人を同一視して、その商人を強く批判しています。カナン人は努力も払わず、かすめ取って豊かになった姑息な商人だ、という訳です。ゼカリヤ書14:21ではもはやそのような者どもはいない、と宣言しています。思い出されるのは主イエスの宮清めです。いつも“なぜイエス様はこのようなひどい事をされたのか”と気になっていましたが、カナン人の土着信仰、日本で言えば「おふだ」、のようなものを扱っていた宮の商人達に、イスラエル信仰の純潔さを知らしめる必要があったのかもしれません。ホセア書12:7に「商人は手に欺きのはかりを持ち、しいたげることを好む」とあるように、カナン商人は、決して良くは思われていなかったようです。

　十二小預言書には裁きの面が強く出ていて、心が圧迫されるものが多いのですが、ゼカリヤ書は裁きと祝福が混在しており、両者が織りなされて登場するような感があります。難解な文書ではありますが、ダニエル書、黙示録など他の文書と比較しながら想像力を働かせればより深い理解に到達できるでしょう。しかし、注意しなければならないのは現代の社会への粗雑な適用でオカルト的な道に入り込むのは避けるべきです。救いの希望というイスラエル信仰の深いところでの連続性を見るようにすべきです。祈ります。

（ご在天の主なる御神、この学びの時を感謝致します。ゼカリヤの壮大な救いの幻が神の子の贖罪の犠牲による救いへと至る、イスラエルの救済史のなかに私たちを置いて下さりありがとうございます。単なる字句上での預言の成就との理解ではなく、イスラエルの歴史の底流に流れる主なる神の救済の業としてのイエス・キリストを仰ぐ信仰をお与えください。私たちがその僕として謙虚にしかし勇気をもってこの世の営みに向かうことができるよう、知恵と力と勇気をお与えください。我らの救い主、イエス・キリストの名によって祈ります。アーメン）